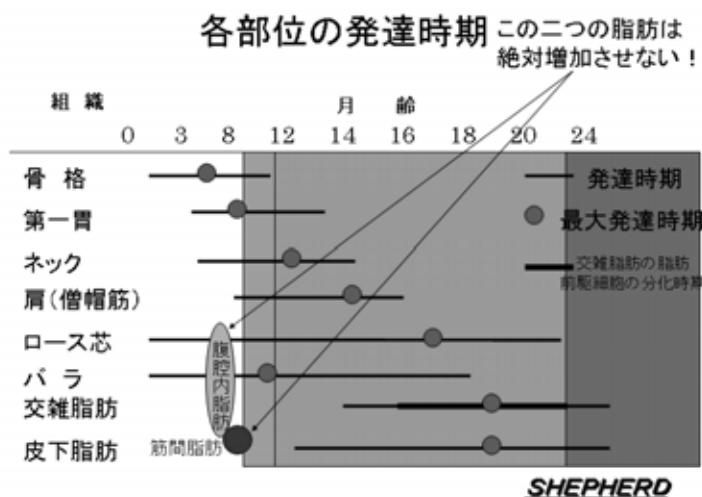


第13回原稿 後期の話 1

先月まで中期のお話を3回連続でお話ししてきましたが、今月はようやく後期のお話に入ります。後期はどのような時期に当たるかという、まずおおざっぱに言って筋肉系の発達がおおむね終了し、脂肪組織のみの発達になります。



ということは、飼料の中身も当然変わってくるわけですよ。なぜかという、筋肉系の発達にはタンパク質がたくさん必要になりますし、筋肉の発達が終了してからは、タンパク質はそんなにたくさん必要ではなくなってきます。

もし不必要なタンパク質を与えていると、せっかく与えたタンパク質がムダになるだけ

ではありません。余ったタンパク質は老廃物としてアンモニアに変化して処理されます。以前お話ししたように、アンモニアは生き物の体の中で発生するもっとも強力な毒物です。アンモニアが全身に回ると肉色が悪くなったり、尿石症になりやすくなったり、肝臓が傷んだりするのでしたよね。ですから肥育のエサは、前期・後期に分かれていたり(中期がある場合もあります。こちらはビタミンのレベルを変えるために使われることが多いですね。)、一本通しのエサの場合には後期に増し餌を加えることで、後期にはタンパクのレベルを落としカロリーを上げる工夫をしてあるのです。

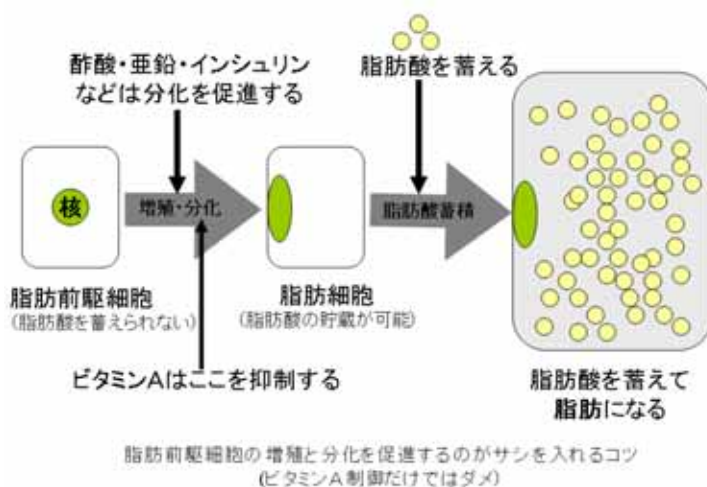
実際、後期のタンパク質(特にDIP:分解性タンパク)が多いと、血液中のアンモニア濃度も高くなりますし、肉色も悪くなることが確認されています。

さて、そのほかに後期にはどのようなことを考えなければならないでしょうか？ 枝肉の特徴のうち、後期に影響を受ける部分は、サシ、脂肪の質、そして肉色です。まずサシのお話からいきましょう。

サシというと15～23ヶ月齢に発達するんじゃないの？という声が聞こえてきそうですね。そうです。ただし、これはサシの細胞の数が増える時期のお話。じつはサシは2段階で増えます。つまり、最初にサシの数が増えて、そのつぎに一つ一つのサシの細胞が脂肪を蓄えて大きくなります。この2つの段階を経てようやく一人前のサシになるん



です。サシは脂肪組織ですから、この時期にどれだけ余分なカロリーを取らせるかで、その大きさは決まります。ですからサシの発達の第2段階に当たる後期のエサは、より



カロリーが高いものを使うのです。また、サシを増やすのに有効といわれているビタミンAのコントロールは、サシの発達の第1段階、つまり15～20ヶ月齢(第1段階は23ヶ月齢程度まで続きますが、ビタミンAの抑制は20ヶ月齢くらいでよいと考えられています)の時期に行えばよいので、後期には飼料摂取量が低下するような低ビタ

ミンにはしない方がサシには有利となります。僕のコンサル先でも、後期(黒毛和腫で20ヶ月齢以降、F1で19ヶ月齢以降)は、ビタミンA欠乏に注意し、欠乏症状が見られたら必ず経口剤(120～200万単位)か注射(100から150万単位)で補うようにしています。このやり方でしたら、サシにも肉色にもシマリにも悪影響はできません。ここで注意したいのは、「後期にはビタミンAは関係ないから」といって飼料に日量10,000単位とかのビタミンAを添加し続けると、血中ビタミンA濃度が150IU以上に上昇し、シマリが低下したり、皮下脂肪が落ちなくなったりする、ということです。ですから僕は後期のビタミンA欠乏には、かならず注射か経口剤(飼料添加でもよいので)1回投与をするように進めます。1回投与でしたら、筋肉注射で500万単位程度打っても血中濃度はそんなに上昇しませんし、シマリが低下することもないです。

それから後期というか、出荷前の話になりますが、中期にしっかり食い込んだ牛は中期から後期に厚かった皮下脂肪が次第に薄くなっていきます。こらが皮下脂肪の老化です。この皮下脂肪に蓄えられていた脂肪は、皮下脂肪が老化して薄くなるにつれてサシなどの寿命の長い脂肪細胞へ移動すると考えられます。ですから中期・後期ともにしっかり食い込ませてやると、その名残で出荷前にもトクができる、ということなのです。このほか、後期には脂肪質のことや肉色のことを考えていかなければなりません。肉色のことだけでも知っておきたいことはいっぱいありますから、来月に肉色特集?としてお話ししますね。



